

女子大学生ハンドボール競技者の左バックコートポジションにおける

1対1の突破プレーについて

安倍 千夏 (201011842, ハンドボールコーチング論)

指導教員：藤本 元, 會田 宏, 山田 永子

キーワード：学生レベル, 1:1の突破プレー

【目的】

左バックコートプレーヤーは右利きプレーヤーがシュートを打ちやすいポジションに位置し, 他のポジションよりもボールを扱う回数が多く, 攻撃の中心となる. 左バックコートプレーヤーはディフェンスと対峙していることが多く, シュート技術と合わせてディフェンスを突破する技術も重要となる.

本研究では, 学生レベルの女子ハンドボールにおける右利き左バックコートプレーヤーを対象にボール保持前, ボール保持の瞬間, ボール保持後の3局面に分けて特徴と傾向を分析することにより, 有効な突破プレーを明らかにし, 自身のこれからの競技生活に生かせる提言を得ることを目的とした.

【方法】

2013年関東学生ハンドボール女子春季リーグにおける114場面を研究対象とした. ボール保持前, ボール保持の瞬間, ボール保持後の3局面ごとに以下の分析項目を設定した.

ボール保持前：位置取り, 高さ, スピード, 動き方のパターン

ボール保持の瞬間：位置取り, ディフェンスとの位置関係, ディフェンスの高さ, 間合い

ボール保持後：フェイントの種類, 突破方向, 歩数, フェイント前後のドリブル, ドリブルの回数, 相手ディフェンスの対応, プレー結果

統計処理には χ^2 検定と残差分析を用いた.

【結果と考察】

本研究の結果, 以下の3点が明らかになった.

(1) ボール保持前のスピードとプレー結果との間に有意な関係が認められ, ボール保持前のスピードがゆっくりの場合は有効なプレーになりづらいことが明らかになった. このことから, ボール保持前のスピードがゆっくりの場合は, フェイントをする前にディフェンスに捕まり, かわすことが難しいため, 有効なプレーになりづらいと考えられる.

(2) ボール保持時のディフェンスの高さとプレー結果との間に有意な関係が認められ, ボール保持時にディフェンスが6m付近に位置した場合は, 有効なプレーになりやすいことが認められた. このことか

ら, 自分をマークしているディフェンスが6m付近にいる場合は, フェイントで突破した時, 隣のディフェンスがフォローの位置にはいりづらく, ゴールまでの距離が近いことシュートにいきやすいことから有効なプレーになりやすいと考えられる. また, 6m付近ではディフェンスはそれ以上後ろに下がることができず, 前につめてくるかそのままの位置で守るというディフェンスの対応を予測しやすいことも一つの要因と考えられる.

(3) ボール保持時のディフェンスの高さとプレー結果との間に有意な関係が認められ, ボール保持の瞬間にディフェンスが6m-9m付近に位置した場合は, パスが多いことが認められた. この要因として6m-9m付近では自分をマークしているディフェンスを突破した後, 防御がフォローにくることが多いためパスが多くなることが考えられる. また, 6m-9m付近でディフェンスを突破した状態で, パスをする次のオフenseも攻めやすい位置でパスを受け取ることができるため, 意図的にパス多く行っていることも一つの要因と考えられる.

【現場への提言】

これらの結果から, 女子大学生ハンドボール競技者の有効な1対1の突破プレーのためには, ボール保持前においてスピードを落とさずに突破プレーに入ること, ボール保持の瞬間においてディフェンスが下がっている時は, 積極的に1:1を仕掛けていくべきであることが示唆された.

ボール保持の瞬間のディフェンスの高さ

	6m付近	6m-9m未満	9m以上-12m
有効	24(58.5%)#	19(29.7%)*	4(44.4%)
有効ではない	16(39.1%)	33(51.5%)	4(44.4%)
パス	1(2.4%)*	12(18.8%)#	1(11.2%)
合計	41(100%)	64(100%)	9(100%)

カイ2乗値=11.348 p<0.05

残差分析の結果, 有意に大きい

* 残差分析の結果, 有意に小さい